

日々の「気づき」から、可能性を広げる

座談会

2020年度は、コロナ禍により、私たち育てる会をはじめ体験活動を実施する団体は大きな影響を受けました。

そうした中で、今後10年、20年と育てる会がどういった方向に進むべきなのかを考えた時、これから会を支えていく若い指導者が何を思っているのか、日々の指導にあたってはいるのか、そこに大きなヒントがあると考え、今回の企画となりました。

答えが出たわけではありませんが、教育に焦点を当てて日々子どもと向き合いながら試行錯誤し、情熱をもつて取り組んでいる指導者の姿が、少しでも伝われば幸いです。

(代表理事・「育てる」編集長 青木 厚志)

・日時 2021年1月26日(火)

15時30分～17時
開催方式…オンライン

・司会

赤坂 隆宏 (あかさか・たかひろ)

八坂美麻学園 統括主任指導員 入職18年

・出席者 (五十音順)

伊藤 僚 (いとう・りょう)

大岡ひじり学園 指導員 入職5年

今野 公彦 (こんの・きみひこ)

くらぶち英語村 指導員 入職3年

寺崎 成希 (てらさき・よしき)

八坂美麻学園 指導員 入職4年

松浦 実穂 (まつうら・みほ)

八坂美麻学園 指導員 入職5年

邑上 貴厚 (むらかみ・たかひろ)

三瓶こだま学園 主任指導員 入職7年

入職のきっかけ



赤坂 隆宏

赤坂 本日は、新春座談会ということで、若手職員の5名の皆さんと語らっていきたいと思います。さて、みなさん、育てる会の職員になって年数も違うと思いますが、それぞれ思いますが、それぞれ育てる会に辿りついた経緯があると思います。職業を選択するに至り、これまでの自分の生い立ちや環境の中で、人との出会い、興味関心に基づいたインパクトある経験など、何かしら、結びつけたきっかけや出来事があったかと思いません。

私は、宮城県の田舎で生まれ育ちました。幼少期の自然体験経験と言えます。祖父母の家での稲作体験を中心に、虫を捕ったり魚を釣ったり、身近な自然を含め多様な体験をしてきました。大学進学で東京に出て

環境のギャップを痛感しました。「都市部で育つ子どもたちは自然体験ができるのだろうか」「生い立ちの中の環境や経験から、都会の子どもたちは、どういう大人になるのか」など考える中で、自然体験、暮らし、子どもというキーワードが自分の中にできて、山村留学と出会いました。

呂上 山村留学の経験につきます。教育関係に進む過程にあっては、高校時代の先生との出会いが大きかったです。先生のような大人になりたい、と教育の道に進みました。ただ、教育実習を進めていく段階から、「学校教育ではない」という考えが出ました。幼

少期の山村留学体験が自分にとって人生の転機となった大きな3年間でした。自分もそういうところで携わりたという思いが湧き、育てる会で働くきっかけになりました。

伊藤 ベースにあるの



呂上 貴厚

は、私自身が5年間山村留学を体験して、集団生活の中で関係を作っていくことの楽しさ、自然の中でいっぱい遊ぶことの楽しさに触れたことがあります。

八坂での山村留学中（中学3年生）に、みんなで1つのことをするためにどんなことをしたらいいのか、一人ひとりとどう関係を作っていたらいいのかを毎晩考えていた1年間で、指導員という仕事をしようと思った一番のきっかけだと思います。

大学は経済学部だったので、まっすぐに教育の道に進んできたわけではないのですが、就職活動をしように思った時、なかなか自分のやりたいことが定まらず、しばらく考える時間を作りました。その時、八坂の棚田の景色がパッと浮かび、その景色の一部になりたいと思いました。自分が求めている環境で、私の経験を生かそうと思い、入職しました。



伊藤 僚

松浦 経緯はいろいろあるのですが、1つは、私自身が学童保育など学校でも家庭でもない他のところで育てられたという意識があることです。「第三の居場所」、「斜めの関係」等、そういう立場からの教育に魅力を感じていました。

育てる会には、小学4年生の時のスキー班、高校生の時の短期活動（当時やっていた山村文化体験活動）に参加した繋がりがありました。その後、大学在学中に有機農業を体験した中で、人の知恵や自然の力から学ぶものの大きさ・魅力を実感し、もっと学びたいという思いもあり、入職しました。

寺崎 私は山村留学や育てる会の経験が無い中で、ここに入ってきました。大学生の頃には、学校教育ではなく学校外教育を専門に学んでいて、様々な団体のキャンプリーダーやスタッフをやりながら「こういう仕事



松浦 実穂



寺崎 成希

「も楽しいな」と思っていました。ただ就職活動は、なぜか違う職種を受けていました。説明会や面接を受けていく中で何かが、つまらないと感じるようになりました。その違和感を大学の教授に相談したところ、育てる会を紹介してもらい、面接を受けたのが出会いになります。

私が生まれたところは茨城県稲敷市というところで、田んぼと畑ぐらしい田舎で育ちました。日々田んぼに遊びに行ったり、畑に行って野菜を採ったりという生活で、今でもその記憶が頭の中にあります。子どもたちと田んぼの活動するときはその記憶が溢れてくる。育てる会を選んだきっかけにもなっています。

また、小中高大とずっと剣道をやってきました。大学生の頃は地元の道場で子どもたちを教える機会が沢

山あり、「勉強ではないものを教えることがすごく楽しい」と肌で感じ、自分の持っているもの、思いを伝えられる場所だと思い、育てる会に就職した経緯もあります。

今野 最初に育てる会の活動に参加したのは、小学5年生の時です。友人から「育てる会の夏休みのプログラムと一緒に参加しないか」と誘ってもらいました。

キャンプの経験が無いのにも関わらず、サバイバル班に投げ込まれて非常に苦しい思いをしました。それが自分の心に残りました。数年後、私のことをサバイバル班に誘ってくれた友人の弟が、八坂麻学園に山村留学に行きました。その友人家族は、山村留学で八坂の良さに惹かれ、6人家族全員が移住したのです。それから山村留学生を見に行く機会が何回かありました。



今野 公彦

その頃の私はハンドボールの競技生活を送っていました。それと同時に、練習や試合の合間を縫ってボランティアリーダーをしたり、研修者として参加したりしました。心の中で「育てる会は自分を育ててくれる場所だ」と感じていて、育てる会で仕事をしてみたい気持ちは小さい頃からありました。

大学卒業後、育てる会での自然体験を生かしたいと思い、日本のアウトドアメーカーに就職しました。そこでロッククライミングや山スキーなど、様々なアウトドアにチャレンジしました。ただ、ビジネスはお金を稼ぐことにフォーカスするので、製品やサービスを売っていくこと、マーケティングを広げていくこと、他のメーカーと差をつけることなどを常に考えていました。同じ「自然」を対象にしていますが、育てる会とはやっていることが全く異なっていました。本当に自分のやりたいことはなんだろうと考えて一旦退職をしました。ちょうどそのタイミングで、くらぶち英語村ができるという話を聞きました。自分がずっとやりたかったことができるチャンスがきた！と思い、育てる会で頑張ってみようと3年前に入職しました。

コロナ禍の中の山村留学

赤坂 2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響があつて、制限された中での山村留学の事業展開が全国的に進められています。コロナの中の山村留学という意味では大変なのですが、見つめ直すこと、あらためて気づくこと、これを転機に取り組める活動など、プラスの発見があつたかと思っています。

邑上 私がいる島根県大田市の山村留学は、他の学園と比べても一番コロナに対する警戒度が高いと感じます。今まで出来ていたアクティビティ的な活動が、かなり制限された中での1年でした。

ただその中でも、近所を探検してみる、雪が降ればかまくらを作ってみるなど、素朴な活動の良さがすぐくクローズアップされてきました。子どもたちには、アクティビティ要素が強い活動に惹きつけられて、素朴な活動には目を向けないということがあります。コロナ禍の自粛で大きな活動ができず、素朴な活動に半ばしようにない気持ちで取り組んでいました。しかし、実際やってみると子どもたちは楽しかったと言います。

その姿を見て、子どもたちを自然の中に解放するという育てる会の原点とクロスしてくるのだと、改めて発見しました。

今野 くらぶち英語村ではスタッフは英語で指示を出します。子どもたちの英語のレベルはそれぞれなので、英語が分からない子どもたちは、生活を成り立たせるのに苦労します。昨年4月と5月はコロナの休校期間でしたが、小中学校が自習室として解放されていたので、子どもたちも午前中は自習をしていました。午後は英語村で過ごす時間がたっぷりあって、英語での生活に慣れるのが例年より早かったのは良かったことだと思います。

緊急事態宣言下の自粛生活では、子どもたちの様子に窮屈感を感じませんでした。英語村には外国人スタッフがいるので、世界中のコロナウイルス情報が集まってきます。外国人スタッフが「日本は世界の状況と比べるとそこまで悪くはない。自分たちができることをすれば大丈夫だよ」と子ども達に声をかけてくれたおかげで、落ち着いた生活が送れたと思います。

伊藤 コロナ禍の大岡ひじり学園では、昼間の9時か

ら17時までは学校の時間に合わせて学習をしています。休憩時間になると、子どもたちは雪あそびなど自発的に自然を求めて外に出ていきます。潜在的に求めているのはそういった自由な時間だと思うので、「時代に対応して、山村留学という環境でどういうことができるのか」をもっと考えていきたいと思っています。

休校期間の間、炭焼きをやっていました。普段の活動では炭焼きは1回で終わってしまうのですが、休校期間は1週間で連続5回、窯入れができました。教員に来てくださった地域の方といっしょに煙の状態を見るなど、山村留学の原点である文化体験ができました。これからも、時間が必要な活動を見直して、取り組んでいけたら面白いと思います。

赤坂 確かにそうですね。全体でダイナミックな活動を組むより、時間的に余裕がある中で個々に興味関心があることに分散していく姿もあったかと思っています。

松浦 私はここ数年、畑を担当しています。今年は外出するような大きな活動ができない中、農作業の時間を季節に合わせて多く取ることができました。季節に沿った活動をしながらゆったりと過ごすことで、心身

共に子どもたちも安定していたと思いますし、個々の関心事を追って遊ぶ時間もありました。山村留学の大人のような体験ができたと思っています。

炭焼きの活動も子どもたちが何度も窯を見に行くなど比較的丁寧に行うことができました。山道を歩くこともしました。今後は、地域の文化体験や自然を感じられる体験をより広げ、深めていくことができれば良いと思っています。

寺崎 時間が取れることが大きいと思います。限りある時間の中ではメインを切り取って活動することもあります。何日かに分けて時間を取ることで、大人が準備していた部分も、子どもたちが自分で活動を作っていくことができると感じました。

昨年の秋、私は「歩く活動」を担当しました。4年目にして始めて歩いた知らない道、ここを進んだらどこに行くのだろう、何が見えるのだろうと。そして「ああ、ここからはこんな景色が見えるのか」と改めて知る機会がありました。

育てる会は、歩くことも大事にしています。実際に自分の足で歩くことで、地域にどうという人が住んでい

るのか、自然の様子やどういう景色が見えるのか、どんな動物が生息しているのか、ゆっくり時間を取って歩く大事さを感じました。

赤坂 コロナ禍のもう1つの大きな影響としては、昨年度の春休み以降、夏、冬と自然体験キャンプを中止せざるを得ない状況になりました。これを機に既存の活動プログラムを転換していくとすれば、コロナ禍中で気づいたこと、特にプラス面を活動内容に加えてアレンジしていく良い機会かと、皆さんの話を聞いていて感じます。自由に提案していただけますか。

邑上 広い野原のようなところで、子どもたちを自由に解き放ちたい気持ちはあります。ただそれだけだと、今の子どもたちを見ていると、どう遊んだらいいのかわからない子たちも多いと思うので、活動を引つ張るリーダー、プレイリーダー（遊びをリードする存在）も必要になってくると思います。

私は、神河やまびこ学園にいた時によくやっていたのですが、自分が先頭に立って裏山の探検隊を組織して遊びに出かけました。自然とどう遊ぶかを大人が示す活動も必要なのかなと思っています。川に行ってもそ

うですが、大人数でワァーとやるのではなく、できるだけ少人数で大人も一緒になってやる。大人が遊び方を提示できる活動も組めたらいいなと思っています。

今野 くらぶち英語村は土日の週末コース、夏休み・冬休みの短期コースの人数を減らして、群馬県内に募集を限定して実施してきました。制限ある中で何ができるかを常に考えながら活動を進めてきて、特に感染リスクを避けるためにも外に出て遊ぶことを意識していました。

英語村の一番の特徴は、英語でコミュニケーションを取ることだと思うのですが、その反面子どもは一人で黙々と遊ぶことが好きだと感じることも多々あります。班で相談しながら活動することも育てる会の活動の良さの1つだと思うのですが、黙って何かに打ち込んで吸収していく活動もやってみたいです。英語とのバランスを取りながら、新たな活動案を模索しています。

寺崎 私は、炭焼き活動は山村文化を知るうえで、面白い活動だと思っています。実際に山に入って木を切る。刃物を使う。ノコギリ、なた、斧を自分で使う機会が今の子どもたちはないと思いますし、他の団体で

もなかなか一連の流れを体験することがないと思うのです。

また、炭を焼いている最中は時間があります。前に作った炭を持ち出して、自分たちで野外炊飯をしてご飯を炊いて食べたり。炭を焼いている時間はいろいろな活動が考えられるので、私は「炭焼を焼く、山村文化活班」はどうかと。

松浦 炭焼きは、本来なら都会の色々な子どもたちに体験してもらえたら一番かもしれませんが、コロナ禍にあるので、地元の子を対象に行う活動でも良いと思います。最近に移住者も増えてきて、大町市の中でも山村文化が失われているところがあると思うので、山村文化を受け継ぐ役割の一端を今後山村留学センターが担うという意味でも良い活動になると思います。

赤坂 私も、地元の子どもたちが必要としている山村活動はあると思っています。視点を変えれば、地元・地域にこんな宝物が残っていたのかということに気づき、活動素材を再発掘する体験になる。

伊藤 大岡ひじり学園の学園長である青木高志さんが「最近の育てる会の活動はリーダーにつながる活動が

減っているね」とおっしゃっていました。

かつては北海道に行ったり、佐渡島で魚を釣って食べるサバイバルキャンプなどがあったそうです。今はそこまでハードな活動は難しいと思いますが、リーダーにつながる活動ができると思います。

寺崎さんの話で、時間があるから、今まで大人が準備していた部分を自分たちで計画を立てて行うという活動の展開ができてよかったとありましたが、子どもたち自身がしっかり時間を取って計画し実践してどうだったか。そんな風に展開していける活動のイメージ、面白いと思います。

赤坂 それだったら、英語村でもできますか。

今野 英語村の活動自体は英語で行うゆえ、シンプルで、異文化に触れる活動なども多くバラエティーに富んでいます。加えて、私はいつも活動の中で「様々な活動の原点は八坂美麻学園にあるからその風景を見て欲しい」と伝えていきます。くらぶち英語村で見える景色は、八坂や大岡から見える北アルプスの景色とは違うものがある。子どもたちには、英語村を故郷と思って欲しい、そして最終的には八坂や大岡の景色が育て

る会の原風景だと知って欲しいです。

また、短期活動での子ども達は、くらぶち英語村に来て英語で話したことよりも、体験活動が楽しかったと言う子が多いです。今後更に体験を深めてもらうために、八坂や大岡に行くともっと濃い体験ができるという動線ができてくると良いなと思います。英語村の良さと、八坂、大岡の良さをこれからどの様に繋げていけるか、ほんやりと考えています。

赤坂 育てる会の一歩の原点は、子どもたちの成長期に必要な体験の場を与えることです。

ところが、社会状況の変化とともに、山村留学の副次的な効果である地域活性や学校存続に注目が集まり、それを主な目的とする山村留学が全国的に増えていった時期もありました。しかし年数を経ると最終的に持続し残ったのは、原点である成長期に必要な体験活動を地域で掘り起こし、そこに光をあてながら地域とともに一緒に歩みを進めていくことに重きを置いて進めてきた場所です。それが今も現存している山村留学の姿だと思います。

それぞれが思い描く、この先の山村留学

赤坂 将来的に育てる会・山村留学の事業展開や活動として、どのようなものを描いていますか。

邑上 富山県南砺市の夏休み活動に行った時、地元の人たちが「こんなにいい所があったんだね」と気づいたシーンが、私はすごく印象に残っています。もつと山村留学指導員の私たちが、地域の人たち巻き込んで連動していく流れを作っていたら、色々などころと連携した団体になれるのではないかと、私は思っています。

赤坂 地域があつてこそその山村留学ですから、地域にとつてどうかということも忘れてはいけない視点だと思えます。ただ、大きな視野で捉えようと、山村留学が日本の子どもを育てるという、人づくりの意味があると思います。

それぞれの職員は、今いる場所や地域がその土壤として選ばれたという気概を持って、ここから飛び立つ子どもたちが日本に留まらず、世界で活躍することに繋がる事業でもあるという高い意識を持つこと、そ

してその視点を地域へ啓発していくのも大切な使命かと思えますね。

伊藤 今、八坂のセンターから見える景色は、ほとんど全部、人工林です。自然のままではなく、人工林を造って管理している地域の人がいることを入職してから初めて知って、その時は衝撃を受けました。植樹が育つまでは60年かかるので、孫の代のために植えているという話を寄り合いの中で聞いた時は、今の地域の景色がそうやって出来上がっていることに、すごく面白いと思いましたし、そういった文化の中に根差した思いを語れたらいいなと考えています。

また、山村留学を教育運動として考えると、自分たちが地域の中にもっともつと出ていくのが大事なのだと思えます。山村留学が続いていつてほしい、自分の第二の故郷になった八坂、同じような中山間地域が存続していくために、どういうことができるかと。

今野 私は、幅広い体験活動の場があつたからこそ、育てる会には沢山のリーダーがいると思います。今後山村留学の需要を掘り起こすために、この事業を幅広い人々に周知していく必要性を感じます。

今、コロナ禍の影響でキャンプやハイキングなどが流行っています。でもそれは、外で時間を過ごすだけの気晴らし、レクリエーションがほとんどです。自然と寄り添って生きる力、田畑をやったことがある、蜘蛛を触れる、蛇が出た時に毒があるかどうかわかる、そういう分別がつかない人が増えてきていると感じます。

自然と共に生きる力を養うノウハウを育てる会は持っています。大人たちが田畑の耕し方を経験する、そしてその体験を子どもたちにも体験させたいと思う。そういう流れが今後はもっと必要になってくるのではないのでしょうか。山村留学は子どもを対象にしていますが、もっと幅広い人に知ってもらうことで、新たな需要が出てくると思っています。

松浦 そのそもその目的は子どもたちにとつての原体験ですから、子どもたちにとつて心の故郷になればと常に思っています。加えて、自分自身が山村留学に魅力を感じたのが高校生の頃の活動だったこともあり、この時代、山村留学の活動は、高校生、大学生、大人、保護者という年代にも響くものと、私も可能性を感じています。

地域とのつながりで言えば、常に地域に感謝をして、また感謝される存在でもありたいと思います。子どもの数が足りないから山村留学が呼ばれ、児童数が満たされれば用無しではなくて、子どもやいろんな人同士の関係、文化を繋ぐ役割を持ちたい。地域にとつても山村留学側にとつても、お互いに感謝できる姿を目指し続けたいと思っています。

寺崎 私は、観点を変えて考えてみたのですが、この先、5年後、10年後はさらに便利になっていきます。例えば農業。田んぼ、昔は手作業で行っていましたが、今は機械を入れてできる。悪くいってしまえば楽が出来る。「楽」が悪いとは言いませんが、やはり多少の「苦」も経験しておけば将来自分の役に立ってくれると思っていますので、そんな意味も込めて、不便な部分も絶やさずにやっていくことも必要かなと思っています。

自分の課題、取り組んでいきたいこと

邑上 だんだん年を取ってきたのか、子どもたちと精一杯遊びきれない自分がいて。子どもたちと同じパワー、

目線で活動をできてこそだと思うので、もう少しその部分を固めていきたいです。もう一つは、自分も地元住民としてどう生活をしていくかを考えていきたい、と思っています。消防団に入ってみるとか、やれるかもしれないけれどもやってこなかったことが多々ありました。

伊藤 去年までは八坂学園にいて、今年は大岡ひじり学園にいます。2つの学園を比較できる立場に立ってみて改めて思うのは、子どもたちへのアプローチの仕方はいろいろあるのだということです。八坂学園は人数が多いので、生活の班があつてそれぞれに動く。大岡は生活班がない。私としても大岡はある意味、馴染みのない、より家庭の環境に近いです。先輩指導員からは「指導者としては口を出したい、手を貸したいという気持ちを抑えて」と教えられて勉強になっています。子どもどうしの支援の中で、指導者として「待つこと」を実践したいと思います。

今野 英語村が始まって来年度で4年目になります。山村留学という日本文化が濃いものと、英語という全く正反対なものが組み合わされている。働く職員も山

村留学の経験を持っている人たちと、外国から来た人たちが混じり合っている。英語に囲まれた生活の中で育てる会ならではのエッセンスをどう入れるかを試行錯誤してきた3年間だったと思います。

4年目を迎えるにあたって、英語村の指導員は「英語だけではなく、活動の質も上げていきたい」と意見がまとまっています。来年度は山村留学の原点に立ち戻って、活動をしつかりと作っていききたい。子どもたちには英語村での生活で、日本文化を知ってもらえたらと思います。

松浦 個人的には、信州的に言う「ずく」みたいなものが欠けてしまうことがあるので、それを付けたいと思っています。これまでには借りた畑をきれいに保てなかったこともありました。地域の信頼を得て、山村文化を理解して、子どもたちやいろいろなものに還元していくには、もっと地道な努力、継続的な地域へのコミットが必要だと思っているので、そこを頑張りたいです。

また、個人的なことではないのですが、職員間の連携、引き継ぎ的な部分をもう少しやっていければと思

います。日々、一人ひとりが試行錯誤したり、考えたりしていることがあると思うのです。それが共有されないことで、活動や指導につながっていない部分があると感じています。共有や相談がもつとできるようになれば、全体としてより良くなるのではないかと思っています。

寺崎 私は来年5年目を迎えます。まだまだ自分のわからないことがたくさんありますが、徐々に職歴も上がってきているので、責任のある言動・行動をしなくてはいけないと思っています。まず私自身が一生懸命全力で取り組んでいる姿を子どもたちに見てもらいたいと思っています。

大人が諦めずにやっている姿、何か一つに力を入れている姿を見るのは、子どもたちの刺激になると思うのです。寺崎さんに聞いたら何か教えてくれるかなあと、私を見て、子どもたちがいろいろなことに興味を持ってくれる人になればと、そういう指導者を目指し頑張っていくします。

赤坂 私は18年目になるので若手に自分の経験や思いを伝えていくことも職務の1つであると思っています。

伝えていくだけでなく、自分の凝り固まった観点から離れて、思い切って任せてみるとことが、私への課題です。

子ども観について

赤坂 最後にみなさんにお聞きします。子どもの本質はあまり変わらないという話もありますが、実際は社会環境が変わってきているため、山村留学に来る子どもたちの生い立ちや育つ環境も変わってきています。多様な子どもたちを前に指導にあたる日々ですが、体験活動の場で、どういう子ども像を描いていますか。日々どんなアプローチをしていますか？

邑上 私は何事も継続できること、発見ができることをすごく大事にしたいと思っています。私を感じている今の子どもたちは、目を惹くものでないと乗ってこないところがあるのです。でも、実際には、そうではないところに良いものとか、考えさせる何かはあるはず。小さなこと、自分が大切にしていることを発見できること、困難がある中で長く続けていくこと、山村

留学1年間でそういうことを見つけて欲しい。収穫祭で発表するような個人体験という大きな枠組みでなくてもいいので、毎日外を走るとか、やりたいという何を何があっても最後まで続ける強さみたいなことを子どもに思い描いて、いつも接しています。

まず、自分がやり続けている姿を見せていくこと。暇そうにしている子に声を掛けて行くのはもちろん、自分が何かしらやる事で、子どもを引っ張って行っています。

今野 私も、自分の好きなことに打ち込む、発見していく力は非常に大切だと思っています。自分の好きなことがわからない、続けていきたいのか、続けたくないのか。楽しい気持ちになるか、どういう気持ちになるか、自分と向き合って沢山のことを1年間で経験してほしいです。山村留学では自由に自分の好きなことを見つけて続けていくことができる。これほど幸せな環境はありません。しかし、自分の好きなことに熱中する傍ら、自分のやるべきことはしっかりとやる。当たり前のことをやってこそ、自由が与えられるというケジメを普段から意識して接しています。

伊藤 子どもが求めているものは、あまり変わらないと思います。コロナ禍で思うように活動ができず、外で思いっきり体を動かしたいという気持ちが今年は爆発している様子もありました。いろいろなことに対して、思い切り取り組める子どもになって欲しい、いつも思っています。

山村留学の時間が、何かやりたいことができた時にそれを自分で達成できる、自己実現をするための力を蓄える期間になってくれればと思います。例えば、誰かと採めた時に、相手がどう考えたのか、一歩引いて客観的に見つめる。そして自分の気持ちと、相手の気持ちとそれぞれ考えて調整していく力がつくかどうか。人との距離が近い分いろいろな要素が山村留学にはあると思うのです。

寺崎 楽な方を選択しやすくなる世代になってきているので、大変な道を選びつつも自分で道を切り開いていけるような子どもたちになって欲しいと思っています。いろいろな壁にぶつかりますが、その壁の間で諦めるのではなく、どう越えていくか。壁を壊していいですし、飛び越えてもいい。そこで諦めるのではない

く、自分で考えて先に行けるようになって欲しいと思います。

最近ではセンターの中で壊れた物の修理を子どもたちの前でやっています。部品を揃えられない時は、自分で考えてこうするところなるよ、と子どもたちに見せながら、答えは1つじゃないということを教えていけたらと思っています。

松浦 育てる会は、「嬉々とした子ども」を求めていると思いますが、個人的には「こうあってほしい」というような子ども像は持たないような心がけています。どういうアプローチをしても、受け取り方や成長の形は個々に違うので。

ただ、私は子どもの頃から良い体験をして、人にも恵まれてきたと思っているので、子どもたちにも豊かな体験、良いコミュニケーションを持っていってもらいたいと思っています。山村留学を終えた後に、自ら良い体験やコミュニケーションを継続できる力を身につけて欲しいです。そのために大切な力は、子どもには難しいかもしれませんが、自分に対する理解、他者に対する理解、周りに支えられていることの理解だと思

います。また、挨拶や会話ができる勇氣、自分の生活をつくる力も必要です。そういうことは、日々言葉にして伝えていきたいですし、まずは個々の観察と一緒に何かをやっていくことからだと思っています。

赤坂 それぞれの指導歴によって、またそれぞれに異なる現場で異なる子どもたちに目を向けながらの日々であるため、描く子ども像もブラッシュアップされたり変化したりしていくものでもあると思います。だから正解はないでしょうけど、1つ言えると思えば、自分の持ち味、強みを知っている子は強いと思います。自分の個性特性、強みに気付き、オリジナルを追求していく力を持つ子どもが、今の私が思い描く子どもの姿かと思っています。

それに向かうには、今回のコロナ禍で気づいた、たっぷり時間を取ってあげること。あまり追い詰めず、あまり急がせず、自発的な芽を大切にしたいということとを、みなさんの話を聞いて今、改めて感じました。長時間どうも有難うございました。これでこの座談会を閉じたいと思います。子どもたちのために頑張っ

ていきましよう！